

新聖堂成聖式 『神現聖堂』と聖体礼儀

主教入堂

1. 到着（聖堂のトロパリ）主教が門に到着するときに歌う。

主よ、なんじが イオルダンに 洗を受くるとき

聖三者の ^{けいはい}敬拝は ^{あらわ}顕れたり けだし ^{ちち}父のこえ

爾を証して 至愛の子と名づけ 聖神も 鳩の形に ^{あらわ}顕れて

^{ことば}言の確かなるを示せり。あらわれて 世界を照らしし

ハリストス かみよ 光栄は なんじに帰す。

2. 聖堂の入り口で主教を出迎え

3. 輔祭「睿智」、聖歌隊、入堂の歌（常に福）を歌う。

Handwritten musical score for a church service, featuring five systems of staves with lyrics in Japanese. The music is written in a simple, accessible style, likely for a choir or congregation. The lyrics are in Japanese, and the notation includes treble and bass clefs, key signatures, and various musical symbols such as notes, rests, and bar lines.

System 1:
つねにさいわいを み ち まったく い さぎ よう

System 2:
して かみをうみし は は や なんぢはじつにほめ

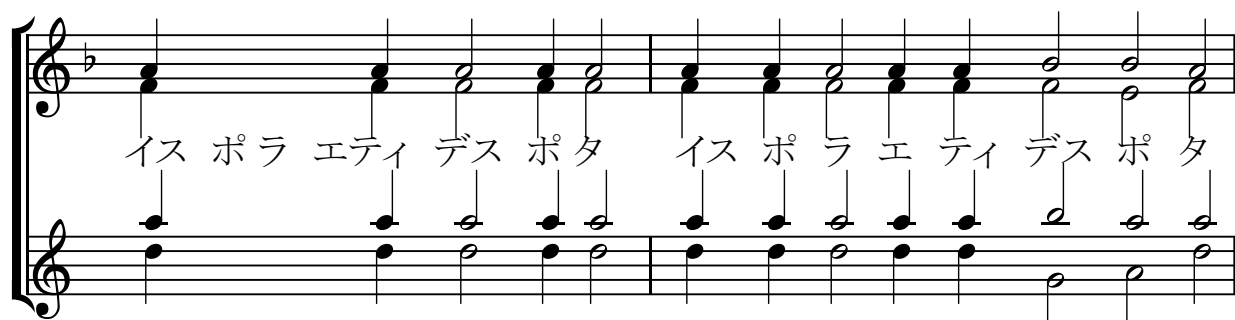
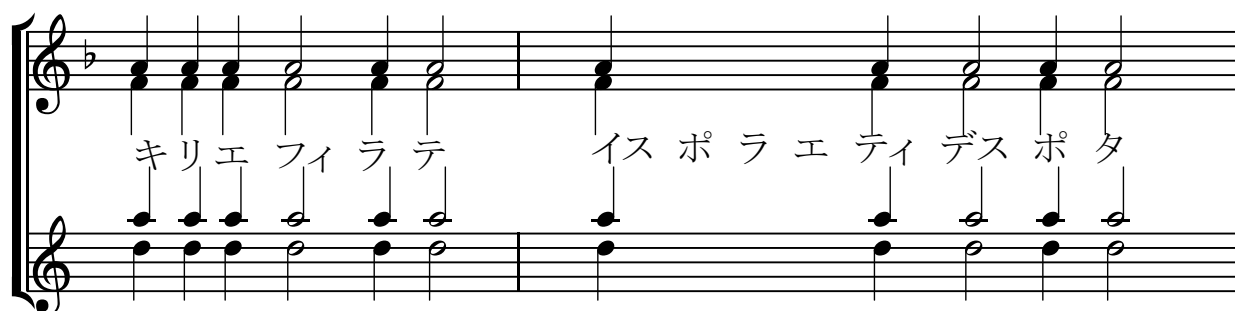
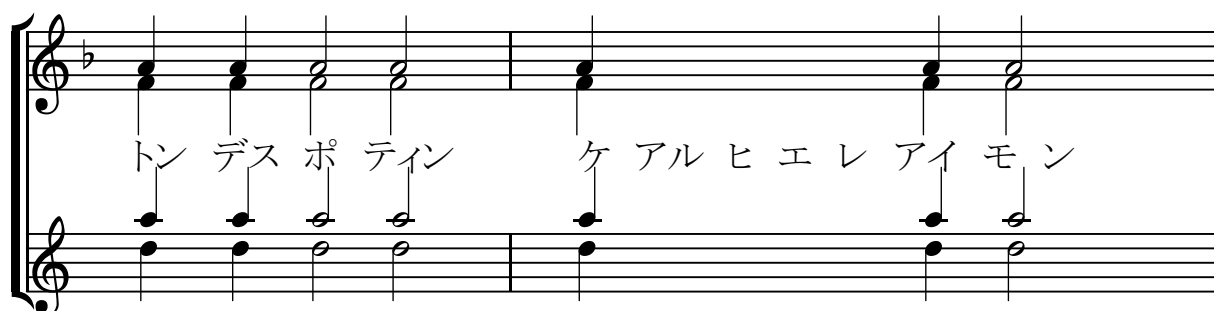
System 3:
らる べ し ヘルムのうえにとおと ま れ

System 4:
光えいたぐいなくセラヒムにまさ り みさおをやふ

System 5:
ら ずしてかみことばをう め り かみのじつの



4. トンデスポティン



5. 主教着装、歌（「爾の霊は・・・」）

主教、聖堂中央のカフェドラの上に立つ。司祭もカフェドラの方へ行く。司祭は祝福を受けた後、至聖所に行く。主教カフェドラに立ち、司祭の持ってくる祭服を順につける。

ソロ: 爾の霊は主を楽しめよ

Music score for 'Solo: 爾の霊は主を楽しめよ'. The score is written on a grand staff (treble and bass clefs) with a key signature of one flat (B-flat). The melody is in the treble clef, and the accompaniment is in the bass clef. The lyrics are written below the notes.

なんじの た ま しい は 主 を た の し め よ

①ソロ: 救いの上着を爾に着せしむるによる。

Music score for 'Solo: 救いの上着を爾に着せしむるによる。'. The score is written on a grand staff (treble and bass clefs) with a key signature of one flat (B-flat). The melody is in the treble clef, and the accompaniment is in the bass clef. The lyrics are written below the notes.

す - く い の う - わ ぎ と よ ろ こ び の き も - の を

なんじに 着 せ し む る に よ - る

(詠) 爾の霊は...

Music score for '(詠) 爾の霊は...'. The score is written on a grand staff (treble and bass clefs) with a key signature of one flat (B-flat). The melody is in the treble clef, and the accompaniment is in the bass clef. The lyrics are written below the notes.

なんじの た ま しい は 主 を た の し め よ

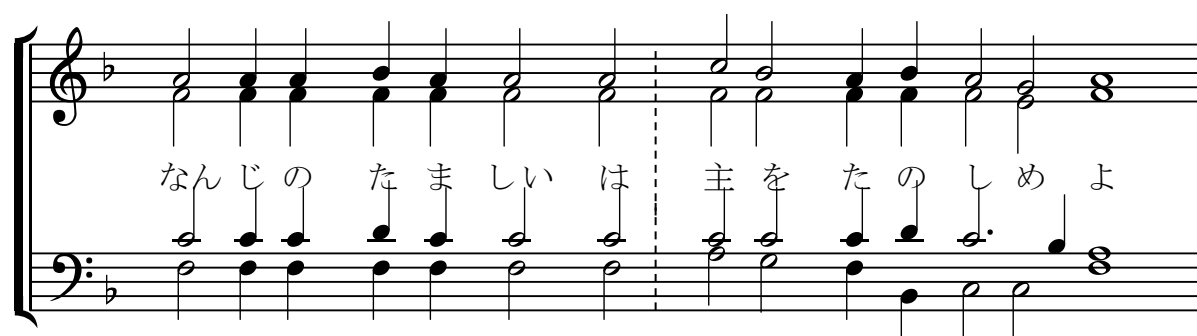
②ソロ: 喜びの着物を爾に着せしむるによる。

(詠) 爾の霊は...

③ソロ: 花婿の如く爾に栄冠をこうむらし、花嫁の如く爾を美しく装うによる。



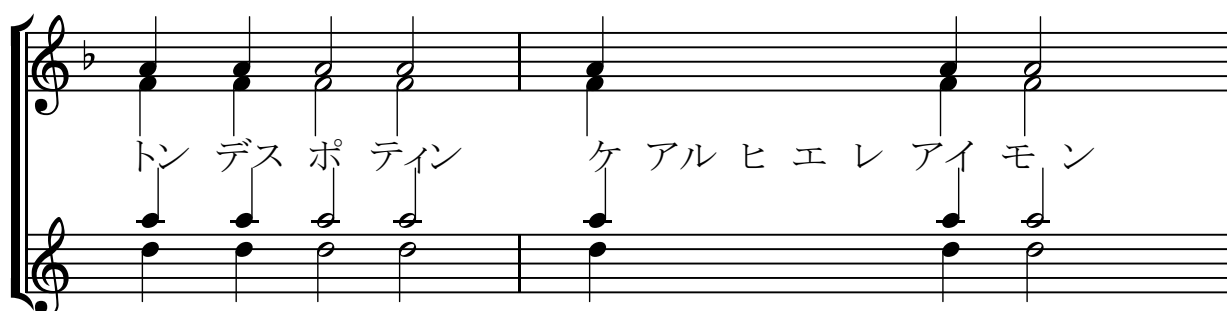
(詠)爾の霊は...



①②③...終わるまで繰り返す。

長輔祭輔祭はアムウオンで主教向かって立ち、香炉を振り、祭衣の祝文を交互に唱える。＜ポドサツコスニク(下着)、領帯、帯、パーリツツァ、套袖、サツコス、オモフォル、十字架、パナギア、ミトラ＞

6. トンデスポティン (着装が終わったら)





成聖式

主教は主教の祭服をすべて付け、祭服の上からスラキツァ（特別の白い服、エプロン）または麻布をつける。
※ ほとんどの成聖式の奉事は至聖所内で神品のみで行われ、連祷も神品のみ。聖所の聖歌隊は同時進行で聖詠を歌う。

○宝座の成聖

【天板の成聖】

輔祭 主に捧らん。

司祭 主憐れめよ

主教 主、神、我が救世主、人類を救うが為に万事を成し、及び行うの主よ、我等爾の当たらずる諸僕の祈祷を入れて、我等に今、定罪せらるるなく、爾を讃揚するが為に「聖なる神現」の名によりて造られし此の堂を成聖し、及びここに宝座を立てるに堪えるものとならしめ給へ。（高声）蓋、およそ光栄、尊貴、伏拝は爾、父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。

司祭 アミン。

◆司祭等は天板を運び、主教は両側から聖水をかけ、宝座の柱の上にセットする。

☆同時進行、聖所では【144 聖詠歌う/唱える】

わ かみ わ おう われなんじ とうと なんじ な よよ あが ほ われ ひび なんじ あが ほ
我が神、我が王よ、我 爾 を 尊 み、爾 の名を世々に崇め讃めん。我 日々に 爾 を崇め讃め、
なんじ な よよ ほ あ しゅ おおい ほ そのいげん はか なん よ よ
爾 の名を世々に讃め揚げん。主は 大 にして讃めらるべし、其威厳は測り難し。世は世に
なんじ しわざ ほ あ なんじ のうりよく の われなんじ いげん こうだい こうえい なんじ きい
爾 の作爲を讃め揚げ、爾 の 能力 を宣べん。我 爾 が威厳の 高大なる光栄と、爾 が奇異
なる作爲とを思念せん。人 爾 が畏るべき作爲の 能力 を語らん、我も 爾 の威厳を宣べん。
ひとなんじ おおい じんじ きねん と な なんじ ぎ うた しゅ こうじ きょうじゅつ かんにん
人 爾 が 大 なる仁慈の記念を稱へ、 爾 の義を歌はん。主は宏慈にして 矜恤 、寛忍に

して鴻恩なり。主は 悉 くの者に仁慈なり、其宏慈は其 悉 くの作爲にあり。主よ、願
 はくは爾が 悉 くの作爲は 爾 を讃榮し 爾 の聖者は 爾 を崇め讃めん、願はくは 爾
 の國の光榮を傳へ、爾 の能力を宣べん、人の諸子に 爾 の能力と、爾 の國の光榮な
 る威嚴とを知らしめん爲なり。爾 の國は永遠の國、爾 の宰制は萬世に迄らん。主は其
 悉 くの言に正しく、其 悉 くの作爲に聖なり。主は凡そ 仆るる者を扶け、凡そ 墜さ
 れし者を起す。悉 くの者の目は 爾 を望む、爾 は時に 随 ひて彼等に糧を賜ふ、爾 の
 手を開き、恵を以て 悉 くの生ける者に飽かせ給ふ。主は其 悉 くの途に義にして、
 其 悉 くの作爲に仁慈なり。主は凡そ 之を呼ぶ者、凡そ 眞實を以て 之を呼ぶ者に邇し、
 彼を畏るる者の 望 を行ひ、彼等の呼ぶ聲を聆き、彼等を救ふ。主は凡そ 彼を愛する者
 を守り、凡そ の不虔者を 滅 さん。我が口主の讃美を述べん、願はくは 悉 くの肉體は彼
 の聖なる名を世に崇め讃めん。

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世に

司祭 アミン。

☆聖所、続けて【第22 聖詠歌う/唱える】

主は我の牧者なり、我萬事に乏しからざらん。彼は我を茂き草場に休はせ、我を 静
 る水に 導く。我が 靈 を固め、己が名の爲に我を義の路に 赴 かしむ。若し我死の蔭
 の谷を行くとも、害を懼れざらん、蓋 爾 は我と偕にす、爾 の杖 爾 の梃は是れ我を安
 んず。爾 は我が敵の目前に於て我が爲に筵を設け、我が 首 に膏を潤し、我が 爵は
 満ち溢る。願はくは斯く 爾 の仁慈と慈憐とは我が生命ある日我に 伴 はん、然せば我
 多くの日主の家に居らん。(王門が開くまで歌い続ける。)

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世に

司祭 アミン

◆石で釘を打ち込む。ミツロウを注ぎ、あふれた分をナイフでこそげとる。

☆王門の前にすばやくオルレツを敷く。王門開く。主教は至聖所を出て、オルレツの上に立つ。
 長司祭が唱える。

輔祭 我等またまた膝を屈めて主に祷らん。

☆神品、信徒もひざまづく

司祭 主憐れめ、主憐れめ、主憐めよ。

主教はオルレツの上に（司祭、輔祭、至聖所内の神品も）跪き、祝文を大きな声で唱える。

主教：無限にして永存なる神、万物を無より有となし、近づき難き光に居り、天を以て宝座となし、地を以て足台となし、モイセイに命令と書式とを与へ、ヴェセレイルに智慧の神[°]を容れて、彼等を奉事の条例たる真理の表式と預象を含有せし、證詞の幕を造るに堪ふる者となし、ソロモンに心の廣潤包大なるを賜ひ、彼を以て古の聖堂を興し、聖にして讃美たる諸使徒に聖神に於けるの奉事と真理の幕の恩寵を新たにし、彼等に依りて爾の聖なる教会と爾の祭台を全地に植え付け、以て爾に聖せられし無血祭を献ぜしめて、今、この〔ハリストスの神現〕の名により、爾と爾の独生子と、

爾の至聖神の光荣の為に造らるるを喜べる萬軍の主よ、親ら不死にして大恩を賜ふの王よ、爾の鴻恩^{めぐみ}と爾の慈憐^{あわれみ}を記憶せよ。蓋、是れ永遠よりあるなり。我等多くの罪に汚れし者を厭う勿れ。又我等の不浄によりて爾の約を破る勿れ。乃、今も我等の罪過を問はずして、我等を堅固にし、我等を爾が生命を施す聖神の恩寵と降臨によって、定罪なくして、この堂を新開し、及び此の内にある祭台を成聖するに堪ふる者となし、此の上に於いても聖詠と歌頌と機密の奉事とを以て、爾を讃美し、及び常に爾の慈憐を讃揚せしめ給へ。嗚呼、主宰、主、我が神、地の四極の恃みよ、我等罪人、爾に禱する者に聴きて、叩拝せらるる爾が全能の至聖神を遣わして、此の堂と、此の祭台を成聖し、此れに爾が永存の光を充て、此を擇びて爾の居所となし、此れを爾が光荣の住居の処となし、此れを爾が神聖なる上天の恩賜にて飾り、此を颶風に遭ふ者の湊、諸慾の醫、弱き者の避所、悪魔の禦ぎとなし給え。願は爾の目は日夜、之が為に開け、爾の耳は畏れと慎を以て此に入り、至尊にして伏拝せらるる爾の名を呼ぶ者の祈禱を聴き、彼等が爾に願う事は、爾、上天に於いて、之を納れ、慈恵を行いて仁慈なる主となり給へ。これを世の終わる迄、動きなく守り、此の裏にある祭台を爾が聖神の能力と行為にて至聖なる者となし、これを榮すること法律に由るの潔淨所に踰え、この上に行うの聖務は、爾の聖なる天上の無形の祭台に登りて、我等に爾の潔淨なる、蔽護^{へいご}の恩寵を降す者となし給え。蓋我等の恃むところは我が手の務めにあらずして、乃爾の言い難き仁慈なり。

◆祝文が終わると主教は立ち上がり至聖所の宝座の前へ。（王門、閉じる）長輔祭は至聖所内で唱える。

◆【大連禱】神品のみ

輔祭 神や爾の恩寵を以て我等を助け救い憐れみ護れよ。

司祭 主憐れめよ、

輔祭 上より降る安和と我等が靈の救いの為に主に禱らん。

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立及び衆人の合一の為に主に禱らん。

輔祭 我等の〔府主救ダニイル、主教セラフィム〕並びに其の手の行う所、及びこれと共にする諸司祭、諸輔祭の為に主に禱らん。

輔祭 この聖堂、及びその内にあるこの祭台の聖神の降臨と能力にて聖せらるるが為に主に禱らん。

輔祭 わが国の天皇、及び国を司る者の為に主に禱らん。

輔祭 この町とおよその町と地方、及び信を以てこの中に居る者の為に主に禱らん。

輔祭 我等諸々の憂愁と忿怒りと危難とを免るるが為に主に禱らん。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讃美たる我等の光荣の女宰、生神女、永貞童女マリヤと諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身を以て並びに悉くの我等の生命を以てハリスト

ス、神に委託せん。

司祭 主爾に

主教 蓋爾は我が神なり、聖にして爾の為に苦を受けし尊貴なる致命者の上に息ふ、我等、光榮を爾、父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に

司祭 アミン。

◆ピッチャーにお湯を入れたもの、赤ワイン、バラ水を主教の所に運ぶ。長輔祭唱える。

輔祭 主に捧らん。

司祭 主憐れめよ。

主教は、頭を屈めて、お湯とワインの上で黙唱。(★以下大連禱と同時進行)

主教 主我が神、爾が救いを為すの^{あらわれ}現にてイオルダンの流れを聖にせし者よ、今も親ら爾が聖神の恩寵を遺はし、此の諸水と酒に福を降して、之を爾の祭台を成聖全備するものとなし給へ。蓋、爾は世々に崇め讃めらる。アミン。

主教 『父及び子及び聖神の名によりてなり、アミン』と、湯を3度宝座にかける。

★スポンジを持ってきてお湯ですみずみまで洗う。

★主教ワインとバラ水を一つの容器に混ぜる。

★ハンカチ布を4枚運ぶ。主教は1枚取り、陪禱者を祝福し残り3枚を渡す。布で宝座を拭う。

☆同時進行、聖所、大連禱が終わったら【第83聖詠歌う/唱える】宝座を洗う間。

ばんぐん しゅ なんじ すまい なん あい わ たましい あつ した しゅ にわ のぞ わ こころ
萬軍の主よ、爾の住所は何ぞ愛すべき。我が靈は厚く慕ひて主の庭を望み、我が心
わ み せいかつ かみ は ばんぐん しゅ わ おう わ かみ すずめ おのれ やどり え つばめ おのれ
我が身は生活の神に馳す。萬軍の主、我が王、我が神よ、雀も己の宿を獲、燕も己
す え ひな なんじ さいだん かたわら お なんじ いえ す もの さいわい かれら つね なんじ
の巢を獲て、雛を爾が祭壇の傍に置く。爾の家に住む者は福なり、彼等は常に爾
ほ あ ちから なんじ たの こころ みち なんじ む hito さいわい かれら なみだ たに
を讃め揚げん。力を爾に恃み、心の路を爾に向くる人は福なり。彼等は涙の谷
とお そのうち いずみ え あめ こうふく これ おお かれら ちから ちから すす
を過りて、其中に泉を得、雨は降福にて之を覆う、彼等は力より力に進み、シオン
おい かみ まえ あらわ しゅばんぐん かみ わ いのり き かみ き い たま
に於て神の前に顯る。主萬軍の神よ、我が禱を聴け、イアコフの神よ、聴き納れ給へ。
かみ われら まも しゅ ふ なんじ あぐら もの おもて み けだしいちにちなんじ にわ あ
神、我等を衛る主よ、俯して爾が膏つけられし者の面を視よ。蓋一日爾の庭に在
るは千日に勝る、我悪者の幕に住まんよりは、寧神の家の闕の側に居らん。蓋主
せんいち まさ われあくしや まく す むしろかみ いえ しきみ かたわら お けだししゅ
神は日なり、盾なり、主は恩寵と光榮とを賜ふ、行の玷なき者より幸福を奪はず。
ばんぐん しゅ なんじ たの hito さいわい
萬軍の主よ、爾を恃む人は福なり。

主教、宝座を洗い、拭った後に誦す。

主教 光榮は我等の神に世々に帰す。

司祭 アミン。

主教、バラ水と赤ワインを混ぜたものを、3度宝座に十字形に注ぐ。司祭等と共に手で、宝座全面にたっぷり塗りこむ。かけるたびに、50 聖詠の句を唱える。

主教 イソップを以て我に沃げ、しかせば我潔くならん。我を洗え、然せば我雪より白くならん。

終わったら以下の聖詠を唱える。

☆聖所【第 50 聖詠 10-21 歌う/唱える】

われ よろこび たのしみ き たま しか なんじ お ほね よろこ なんじ かんばせ わ
我に 喜 と 樂 とを聞かせ給へ、然せば 爾 に折られし骨は悦ばん。 爾 の 顔 を我が
つみ さ わ ことごと ふほう け たま かみ いさぎよ こころ われ つく ただ たましい
罪より避け、我が 盡 くの不法を抹し給へ。 神よ、 潔 き 心 を我に造れ、正しき 靈
を我の衷に 改 め給へ。我を 爾 の 顔 より逐うこと母れ、 爾 の 聖神を我より取り上ぐ
ること母れ。 爾 が 救 の 喜 を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の
もの なんじ みち おし ふけん もの なんじ かえ しゅさい しん もつ われ かた たま われふほう
者に 爾 の道を教へん、不度の者は 爾 に歸らんとす。 神よ、我が 救 の神よ、我を血よ
り 救ひ 給へ、然せば我が舌は 爾 の義を讃め揚げん。 主よ、我が 唇 を啓け、然せば我が
くち なんじ さんび あ けだしなんじ まつり ほつ ほつ われこれ たてまつ なんじ やきまつり
口は 爾 の讚美を揚げん、蓋 爾 は 祭 を欲せず、欲せば我此を 獻 らん、 爾 は 燔祭
を 喜 ばず。 神に 喜 ばるる 祭 は痛悔の 靈 なり、痛悔して謙遜なる 心 は、 神よ、 爾
かる たま しゅ なんじ めぐみ よ おん た じょうえん た
輕んじ給はず。 主よ、 爾 の 恵 に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの 城垣 を建て
たま そのとき なんじ ぎ まつり ささげもの やきまつり よろこ う そのとき ひとびとなんじ さいだん こうし
給へ。其時に 爾 義の 祭 、獻物 と 燔祭 とを 喜 び饗けん、其時に 人人 爾 の祭壇に 犠
そな
を奠へんとす。

◆白布(ハンカチ大)で宝座をぬぐう。

主教我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

司祭アミン。

聖膏で宝座に十字を描く。長輔祭、塗るたびに

輔祭 謹みて聴くべし¹

神品『アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ』

☆同時進行聖所【第 132 聖詠】聖膏で宝座を成聖する時歌う

けいていむつま お ぜん かな び かな こ たから あぶら こうべ ひげすなわち
兄弟 睦 しく居るは、善なる哉、美なる哉。是れ 寶 なる 膏 が 首 にありて、髯 即 ア
アロン ひげ なが そのころも すそ なが ごと つゆ ざん くだ ごと
アロンの髯に流れ、其 衣 の裾に流るるが如く、エルモンの露のシオン山に降るが如し。
けだしかしこ おい しゅ こうふく えいせい めい
蓋 彼處に於て主は降福と永世とを命じたり。

¹ Вонмем、「心を附けよ」となっていたが、現行の「謹みて聴くべし」に変更した。

主教 聖三者、我らの神よ、光栄は爾に帰す
司祭 アミン、

◆宝座に覆いを掛け、ヒモで縛る。

☆同時進行聖所【第 131 聖詠】を歌う。宝座をヒモで縛る時

主よ、ダウィドと其 悉く の 憂 とを記憶せよ。彼主に誓ひ、イアコフの 有能者に約し
て云へり、我我が家の幕に入らず、我が榻に登らず、我が目に寐ね、我が 瞼 に眠るを容
るさずして、主の爲に處所を得、イアコフの 有能者の爲に住所を得るに迫らんと。視よ、
我等之をエフラフに聞き、之にイアリムの田に遇へり、往きて彼の住所に就き、彼の足 凳
に叩拜せん。主よ、爾 及び 爾 が 能力 の匱は 爾 が安息の 所に立てよ。爾 の司祭等
は義を衣、爾 の諸 聖者は 悦 ばん。爾 の僕ダウィドの爲に、爾 が 膏 つけられし者の
面 を轉ずる 母れ。主は眞實を以てダウィドに誓ひて、之に背かざらん、曰く、我 爾 が
腹の果を以て 爾 の寶座に坐せしめん。若し 爾 の諸子我が約と、我が彼等に誨へんとす
る啓示とを守らば、彼等の諸子も亦永く 爾 の寶座に坐せん。蓋 主はシオンを擇び、此を
以て其住所とするを望めり、曰く、此れ我が世の安居なり、我此に居らん、蓋 我之を
望めり。我其糧を 祝福 し 祝福 せん、餅を以て其貧しき者を饜かしめん。我 救 を以て
其司祭等に衣せん、其諸 聖者は 喜び 悦 ばん。我彼處に於てダウィドに角を 長 ぜしめ、
我が 膏 つけられし者の爲に 燈 を立てん。我其敵に耻を衣せん、其 冕 は其上に耀
かん。

主教 光栄は我等の神に世に帰す

宝座に上覆いをかける。

☆同時進行【第 92 聖詠】を歌う/唱える

主は王たり、彼は威嚴を衣たり、主は 能力 を衣、又之を帯にせり、故に世界は堅固に
して動かざらん。爾 の寶座は 古 より堅く立ち、爾 は世の 前より在せり。諸川 聲を
騰げ、主よ、諸川 其聲を騰げ、諸川 其波を騰ぐ。然れども主が最高きに於て強きは多
くの水の聲に勝り、海の強き浪に勝れり。爾 の啓示は 誠 に正し。主よ、聖徳は 爾 の
家に屬して永遠に至らん。

(王門が開くまで続ける、開いたら 25 聖詠)

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世に

司祭 アミン。

王門を開く。

○至聖所、聖所の成聖（炉儀、聖膏で十字を描く）

長司祭が主教に香炉を手渡し、炉儀。宝座、奉献台、至聖所内。長輔祭はロウソクを持って先導。全堂も同様に行う。²主教が炉儀するとき、掌院二人（または典院、司祭）、が続き、一人は聖水をかけ、一人は聖膏を竿の先の筆につけて、十字を描く。最初は至聖所内、高座の窓の上、教会の西門、南面つづいて来た面の門または窓の上。高さが高いときは台または長い竿を用いる。主教は至聖所に戻る。

☆【第 25 聖詠を繰り返す】 主教の炉儀終わるまで。

ソロ
主よ、我を判き^{さば} たま え^{けだし} 蓋 我きずなくして 行 けり
我 主を たのみて う ごか ざらん

聖歌隊
主よ、我を試み、我を た め せ 我が腹と我が心とを 融^とかした ま え
蓋、爾^{じれん}の慈憐は 我が目の前に 在^あり 我 爾の 真実に ゆ けり
我偽^{いつわり}りなる者とともに 坐^ざせ ざりき 邪^{よこしま}なるものと とも に行かざらん
我悪^{はか くみ}を計る党を にく めり 不虔^{ふけん}の者と とも に 坐^ざせ ざ らん
主よ、我 無罪を以て 我が手を あ ら い 爾の祭壇を め ぐ り て

² （長輔祭がともしたロウソクを持つ。聖事経の後代の注意書きによれば、このときまで至聖所に明かりは灯さず、長輔祭のロウソクは前日の徹夜祷の前に灯した宝座の四隅に置いたロウソクから取る。成聖式が始まると、司祭たちによってテーブルが至聖所に運び込まれ、この4つのロウソク立てはイコノスタスのイコンの前に置かれる。）



主教 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

長輔祭は主教から香炉を取り、3度主教に炉儀、宝座の前に炉儀。主教の左横で小連禱。

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん。

詠隊 主憐れめよ。

輔祭 神や爾の恩寵を以て我等を佑け救い憐れみ護れよ。

詠隊 主憐れめよ。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身を以て並びに悉くの我等の生命を以てハリストス、神に委託せん。

詠隊 主爾に

主教 [祝文] 天地の主、言い難き智恵を以て爾の聖なる教会を建て、天に於ける諸神使の事事に象りて、地に神品の班位を設けし者よ、爾大恩を賜うの主宰よ、今も我等祈祷する者を受け給え、これ我がこれらの事を願うに堪うる者たるにあらず、即ち爾が仁慈の秀絶の著わるるが為なり。蓋爾、多方を以て人類に恩を施すを息めず、爾が賜いし所の諸恩の首は、

即ち爾の独生子が肉体を以て来たるにあり。彼は地に顕われ、暗きに居る者に救いの光を照らし、己を祭として我等の為に献じ、全世界に浄むる者となり、我等を其の復活に興る者となし、天に昇りてかつて約せしが如く、其の門徒と使徒に衣するに 上よりの力、即ち伏拝せらるる全能の聖神、爾、神・父より出ずる者を以てせり。これによりて彼等は行いと言に有能なる者となり、子となすの洗礼を伝え、諸教会を興し、諸祭台を立て、神職の規程と法律を定め、我等罪人彼等の傳を守りて、爾永遠の神に俯伏し、爾仁慈なる者に禱る、爾を讃詠するが為に造られし、この聖堂に爾が神聖の光栄を満て、この中に建てられたる祭台を至聖所となして我等が爾の国の畏るべき宝座の前に立つが如く、其の前に立ち、定罪なく奉事して、爾に我等及び衆人の為に祈禱を捧げ、爾の仁慈に無血祭を献じて、自由と不自由の諸罪の赦免、生命の良途、行為の善進、衆義の確守を得る者となるを得せしめ給え。

(高声) 蓋、爾父と子と聖神の至聖なる名は崇め讃めらる、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

主教 衆人に平安

詠隊 爾の神にも

輔祭 爾等の首を主に屈めよ。

詠隊 主、爾に

主教 [黙唱祝文] 主、万軍の神よ、我等爾に感謝す。蓋爾は聖なる使徒及び我が克肖なる諸神父に注ぎたる恩寵を爾の大いなる仁愛によりて、我等不当なる爾の罪僕にもおよぼすを喜べり。仁慈なる主宰よ、爾に禱る、この祭台に光栄と神聖と恩寵を満てて、其の上に爾に献ぐる所の無血祭品の爾の独生子、主、神、我が救世主イイスス・ハリストスの至浄の体、至尊の血に変化して爾の衆人と我等不当の者との救いを成すを得せしめ給え。(高声) 蓋、爾は我等の旅我等を憐れみて救うの神なり、我等光栄を爾、父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

主教 平安にして出ずべし

○十字行と不朽体の嵌入 ※不朽体を近隣の教会まで取りに行かない場合

成聖する聖堂の近くに他の聖堂が無い場合、不朽体は前晩より本堂の内、王門、右側の救世主の聖像の前に台を設けて安置する。

主教は王門を出て、不朽体の前にオルレツを敷いて立ち、祈り陪禱者に降福。不朽体に3回炉儀する。

【トロパリ4調】歌う。

ハリストス神よ、全世界にある爾が致命者の血にて、紅の美服の如く飾られたる爾の教会は、彼らを以

て爾に呼ぶ、爾の民に恩澤を降し、爾の住居に平安を与え、我等の霊に大なる憐みを垂れ給え。³

ハリストス かみよ 全世界にある 爾の 教 かい は

爾が致命者の 血 にて くれなゐ びふく ごと かざ 紅の美服の如く 飾られたる

彼らを以て 爾に 呼ぶ なんじ おんたく くだ すまい 爾の民に恩澤を降し、爾の住居に

平安を あたえ たまい 我等の霊に 大なる 憐れみを 垂れた まえ

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世にアミン

【コンダク 8 調】

主 よ 全 世 界 は ほうしん 捧神なる 爾の 致命 者を

4

³ (原文) 「ハリストス神よ、爾の教会は全世界に爾が致命者の血にて、＜縫袍臈布＞美しき紫布の如く飾られ、彼らを以て爾に呼ぶ爾の民に爾の鴻恩を降し、爾の住居に平安を与え、我等の霊に大なる憐みを垂れ給え」衆聖人の主日、致命者のトロバリと同じなので、入れ替えた。Иже во всем мире мученик Твоих, яко багряницею и виссом, кровью Церковь Твоя украсившися, теми вопиет Ти, Христе Боже: людем Твоим щедроты Твоя низпосли, мир жительству Твоему даруй и душам нашим велию милость.

⁴ (原文) 「主よ、全世界は捧神なる致命者を万物の初実として、爾万物を植え附けし者に奉る。大仁慈なる主よ、彼らと生神女の祈祷に依りて爾の住所なる爾の教会を深き平安に守り給え。」衆聖人の主日コンダクと同じにつき入れ替え。

ばんぶつ はつもの 物として ばんぶつ 爾萬物を植え付けし者に たて まつる

だいじんじなるもの よ すまい 爾の住所なる爾の 教 か い を

彼ら及び生神女の祈禱 によつて 深き平安に守り た ま え

【小連禱】⁵

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐れめよ。

輔祭 神や爾の恩寵をもって我等を助け救い憐れみ護れよ。

(詠) 主憐れめよ。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身をもって並びにことごとくの我等の生命をもってハリストス、神に委託せん。

(詠) 主爾に、

主 あわれめよ 主 あわれめよ 主なんじに アミン

⁵ 明治の祈祷書には諸司祭が「主、憐れめよ」を唱えるようになっているが、ロシアのテキストに従って、聖歌隊が歌うことにした。

主教、蓋爾は我が神なり、聖にして爾の為に苦しみを受けし尊貴なる致命者の上に息う、我ら爾、父と子と聖神に光栄を献ず、今も何時も世世に。

(詠) アミン、

(2回)

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ 我等を 憐れめよ

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ 我等を 憐れめよ

輔祭 主に祈らん。

(詠) 主憐れめよ。

主教 【祝文】爾の言に誠なる爾の約に ^{いつわり} 謊 無き主、我が神、爾の聖なる致命者に善戦を戦い、
敬虔の馳驟^{ちしゅう}の程をつくし、真実の承認^{てい}の信を守るを賜いし至聖なる主宰よ、爾親ら彼等の祈
禱を聴き納れて、我等不当なる爾の僕に彼等と共に分与と嗣業を有たした我等は、彼等に倣^{なら}
ふ者となりて、彼等が受けんとする幸福をも受くるに堪うる事を得せしめ給え。
(高声) 爾が独生子の慈憐と仁愛に依りてなり、爾は彼と至聖、至善にして生命を施すの爾の
神[°] と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に、⁶

(詠) アミン。

輔祭 爾の首を主に屈めよ。

詠隊 主爾に

主教 【祝文】主我が神よ、至聖なる我が女宰、生神女と諸聖人の祈祷に依りて、我等不当
なる爾が僕の手^{わざ}の工^{わざ}作^{わざ}を助けて、我等が万事に於て爾の仁愛を喜ばしむるに堪うるを得せし
め給え。(高声) 願くは爾、父と子と聖神の国の権柄は讃揚、讃栄せられん、今も何時も世世
に。

(詠) アミン。

⁶ Господу, верному в словах Своих и **неложному** (いつわり) в обещаниях, Который даровал святым Своим мученикам подвизаться добрым подвигом, совершить **течение**(流れ) благочестия и сохранить веру истинного исповедания, чтобы и недостойным рабам Своим Он дал участие в наследии с ними и сделал благими их подражателями.

【十字行】

主教 長輔祭より香炉を取り、炉儀を不朽体の前に三度行う。不朽休を載せるディスコス、星架上の大気を覆うものを取り、これを両手で戴き、王門より出る。

十字行の順序は凱旋旗、及び聖堂の聖像、聖歌隊、諸司祭、ロウソクを持つ者、杖を持つ者、其の中間にミトラ、長輔祭と輔祭は香炉で不朽体と主教に炉儀。輔祭はディスコスの上にリピダ二本、（または四本）をかかげる。主教の前に、副輔祭はディキリ、トリキリイを持つ。

聖堂の外を回る。西門より始めて、南回りで東方に向かう。この時、司祭ひとり先導して聖水を堂に撒き、成聖して行く。

【トロバリ第3調】歌う

信の石に爾の教会を建てし仁慈の主よ、此の中に献ぐる我等の祈禱を助け、信を以て爾に向ひ、我が神よ、我等を救え、我等を救へと呼ぶ人々を受け給へ。

トロバリ 3調 Zm

信の石に 爾の教会を建てし 仁慈の主よ、

この中に献ぐる 我等の 祈禱をたすけ 信を以て

爾にむかい 我がかみよ 我等を 救え 我等を 救えと

呼ぶ ひとびとを 受けたまへ

続けて。

【第3調 第3歌頌】

主、爾を頼む者の固めよ、爾が尊き血にて獲たる教会を堅め給へ。⁷

イルモス 3調 Zm

主 爾を頼む者の かた め よ、 爾が ^{とおと}尊き 血 に て

獲たる 教 かいを か た め た ま - え

【第8調 第3歌頌】

⁷ 連接歌集のものに変更「爾を侍む者の固めとなるの主よ、爾が尊き血にて求めし教会を固め給え。(成聖式)から」

主、天の^{おおぞら}穹蒼の至上なる造成者、教会の建立者、^{きぼう}冀望の^{かぎり}極、^{かため}信者の^{ひとり}固、独人を愛する者よ、我を爾の愛に堅め給へ。⁸



【第5調 第3歌頌】

己の命にて虚しき^{ところ}處に地を固め、保ち難く重き者を懸けしハリストス、独仁慈にして人を愛する主よ、爾が誠めの動かざる石に爾の教会を堅く立て給へ。⁹



(一周して聖堂の門に至るまでくりかえす。)

堂の大門に来た時、聖歌隊は次のトロパリを歌う。王門前にあらかじめテーブルをセットしておく。

【トロパリ 第7調】

聖なる致命者は、よく難を受けて栄冠をこうむる者、主に祈り給え。我が霊を救わん事を。(2回)
ハリストス神や、爾を讃揚す、使徒の誉れ、致命者の喜びよ、それらの教えは一体の三者なり。

⁸天体を構造し、教会を建立せし主、希望の極、信者の固なる独り人を慈む者よ、我を爾の愛に固め給へ。

⁹己の詔にて虚しきに地を固め、保ち難く重き者を懸けしハリストス独り仁慈にして人を愛するの主よ、爾が誠の動かざる石に爾の教会を堅く立て給え



主教、頭上より不朽体を載せるディスコスを降ろし、聖堂の前に堂に用意した台に置き、三度伏拝し、ミトラを載き、右左の諸司祭に降福する。聖歌隊はトロパリを歌い終わり、先に聖堂に入る。門を閉じる。(聖歌隊のみ中、主教等は外)。司祭等はイコン、福音經、十字架を持って、扉の前で西向きに立つ。テーブルには覆い(altar cloth)をかけ、四隅(あるいは2本)ロウソクを立てる。輔祭、不朽体の上にリピダ(うちわ)をかかげる。長輔祭は香炉を主教に渡す。主教はそれを取り、ディスコスに3度炉儀。左右の福音經、十字架、左右のイコンと教役者に炉儀。長輔祭は香炉を受け取り、主教に向かって炉儀。

主教は不朽体の前で進み、

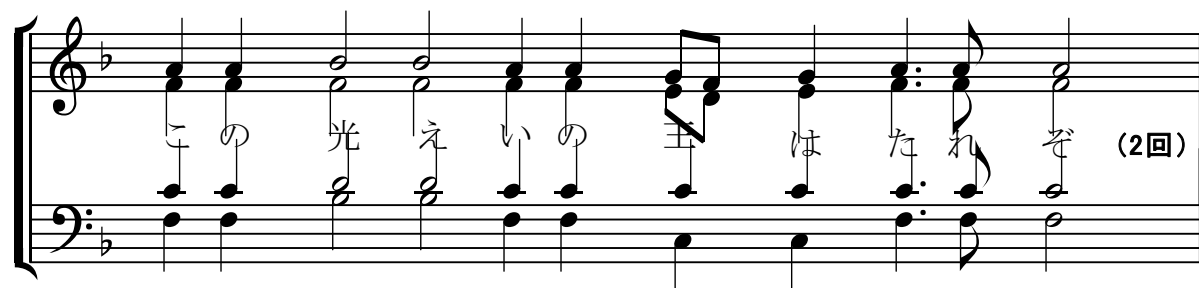
主教 ハリストス我等の神よ、爾は常に讃揚せらる、今も何時も世世に。

聖歌隊は聖堂の中から

(詠) アミン。

主教 門よ、爾の首を挙げよ、世世の戸よ、挙げられよ、光栄の王、入らんとす。

聖歌隊は聖堂の中から



主教はもう一度唱える。

主教 門よ、爾の首を挙げよ、世世の戸よ、挙げられよ、光栄の王、入らんとす。

(詠) この光栄の王は誰ぞ。(同上)

輔祭 主に祈らん。

(詠) 主憐れめよ。

主教ミトラをとって以下の祝文を唱える。

主教 永遠に讃揚せらるるの神、我が主、イイスス・ハリストスの父、其の子の肉体の幕を以て祝する者の住居と喜ぶ者の声と、有る所の天に録されし首生者の教会に入ることを我等の為に改め開きし仁慈なる主宰よ、祈る我等不当なる爾の罪僕、至聖なる爾の堂、即ち我が肉体、爾が讃美たる使徒パウエルを以て、爾の堂及び爾のハリストスの肢体と名付くるを喜びし者を象る此の「神現」の尊貴なる堂の新開を祝う者を顧み、此の堂を世の終わる迄、動きなく護り、此に於いて爾の光栄を顕し、我等に斯の中に於て爾と爾の独生子、我が主、イイスス・ハリストス及び爾の聖神に辱を得ずして、頌美讃詠を献ずるを得せしめ、智慧と心、及び爾を畏るるの畏れを以て、爾に伏拝する者を神聖の恩澤を蒙るに堪うる者となし、我等及び爾が衆人の為に、爾の言い難き慈憐に捧ぐる此の祈りを、爾の仁愛に受けらるる者とならしめ給へ。至浄なる我が女宰、生神女永貞童女マリヤの祈祷に依りてなり。(高声)蓋、爾は我が神、聖にして聖なる者の上に息ふ、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

(詠) アミン

主教 衆人に平安

(詠) 爾の神にも

輔祭 爾らの首を主に屈めよ。

(詠) 主爾に

主教 (聖入祝文黙唱) 主宰、主、我等の神、天に神使、神使首の品級の軍を立てて、爾が光栄の奉事者となせし者よ、求む、我等の入るに伴ふて、我等と偕に務め、爾の至善を讃栄する聖神使等の入るを致させ給え。(高声)蓋、凡そ光栄、尊貴、伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に

(詠) アミン

続いて主教、不朽体を載せるディスコスを取り、堂の門に向かい十字形を画して誦す。

主教 万軍の主、彼は光栄の王なり。



聖歌隊が最後に歌う時、テーブルを脇に寄せ、主教は不朽体を載せたディスコスを戴いて堂に入る。このとき

【トロパリ 4 調】を歌う。聖歌隊は門の扉の内側から定位置に戻る。

うえ おおぞら び すまい
爾は上の穹蒼の 美のごとく 爾の光栄の聖なる住居の

した うるわ あらわ しゅうじん いのち ふっかつ
下なる美しきを とともに顕せり 衆人の生命 及び復活たる

しょうしんじょ げんじ
主よ 生神女によりて これを世世に 堅固にし

うち
その中に絶えず我等が爾に奉る祈禱を 容れたまえ

主教、王門より至聖所に入り、不朽体を嵌入。時間がかかるようだったら上記トロパリを繰り返す。

◆至聖所で

輔祭 主に祈らん。

司祭 主憐れめよ。

主教 (祝文) 主我が神、爾の為に苦しみを受けし、聖なる致命者にその聖軀（不朽体）が全地に於いて、爾の聖堂に播かれ、医を施すの果を結ぶ光栄をも賜ひし主宰、親ら万福を施す者よ、爾が此の尊貴なる爾の祭台に安置するを喜べる聖軀の聖人の祈祷に因りて、我等を其の上に於いて、定罪なく爾に無血祭を献ぐるに堪うる者となし、我等が凡そ救いに務むるの願いを聴き納れ、爾の聖なる名の為に苦しみを受けし者に其の我が救いを助くるの奇跡を行うを以ても報い給え。

(高声) 蓋、国と権能と光栄は、爾、父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。

司祭 アミン。

長輔祭 我等、又々膝を屈めて主に祈らん。

※主教、司祭、輔祭、聖堂にいる全員ひざまずく

(詠) 主憐れめよ、(3 次)



主教 主、我が神よ、爾一言を以て万物を造りて、其の存するを致し、言い難き多様を以てこれを飾り、これを覆育する爾の神^oを用いて、日の光を注ぎて、之を養成し、爾の義人モイセイに感孚^{かんぷ}して、爾の最と美しき造物に特種の誉れを賦せり。蓋、彼は爾、光を覩て善となし、之を昼と名付けたりと言へり。是を以て我等も、斯の至りて明なる日、毎日造物を養成する者を覩て、爾、真の日及び爾が暮れざるの光を讃揚す。爾は爾の独生子を以て、我等に我が性の爾が聖神によりて養成せらるるを戒め、此の恩賜によりて義人等日の如く輝くを致せり。我等爾に祷りて、爾、言、主、我が神の父に求む（蓋、爾の言い難き仁愛、爾の量り難き怒憐に由りて、造物は古^{いにしへ}、彼の奇異なる棘、及び爾がシナイ山の現れ、及びしょう證詞の幕、ならびに彼のソロモンの至りて美しき聖堂に於ける養成の法をも、新約の預象として受けり）仁慈の目を以て、我等不当なる爾の罪僕、今此の天に似たる室地の誉れなる者の内、言い難き爾が光栄の真の祭台の側に在る者を顧みて、爾の至聖神を我等及び爾の業に遣わし、聖ダヴィドの言ふ如く、正直き霊を我等の衷に改め、主宰たるの神^oを以て我等を固め給え。我が国を司る者に見ゆると見えざるの的に勝つこと、及び我等衆人に協和と平安なるを賜ひ、爾を愛するによりて、務めてこの堂を造り、及び此を成聖する者に罪の赦しを与へ、彼等に凡その救いに務むるを得せしめ、彼等を興して爾の誠を行わしめ、彼等に爾が聖神の恩賜の改新を授けて、定罪なく爾、唯一の真の神、及び爾が遣わししイエス・ハリストスに伏拝せしめ給へ。至浄なる生神女（讃美たる聖使徒ペートル、パウエル）及び諸聖人の祈祷に依りてなり。アミン。

主教に続いて、全員立ちあがる。

長輔祭 神や爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐れみ護れよ。

(詠) 主憐れめよ。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身をもって並びにことごとくの我等の生命をもってハリストス、神に委託せん。

(詠) 主爾に。

主教 蓋爾は我が神なり、聖にして爾の為に苦しみを受けし尊貴なる致命者の上に息ふ。
我ら光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に

(詠) アミン。

主教は権杖を取り、通常装束を着けるところ（聖堂中央のカフェドラ）に行く。その場所がなければ至聖所前のアンボンの上。諸司祭はランクに従って左右に並ぶ。主教は祈り終わり、降福。

【重連祷】

輔祭 神や、爾の大いなる憐れみに因りて我等を憐れめよ、爾に祈る、聞き納れて憐れめよ。

(詠) 主憐れめよ。(3回)

輔祭 又、我が国の天皇、及び国を司る者の為に祈る。

輔祭 又、全日本の府主教ダニイル及び主教セラフィム、及びハリストスに於ける、ことごとくの我等の兄弟の為に祈る。

輔祭 又恒に記憶せれるる、この聖堂の建立者、及びすでに寝むりし、ことごとくの父祖兄弟、この所と諸方とに葬られたる正教の者の為に祈る。

輔祭 又神の諸僕、我等の兄弟に慈憐、生命、平安、壮健、救護、春顧、寛宥、及び諸罪の赦しを賜わんが為に祈る。

輔祭 又この至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此処に立ちて爾の大いにして豊かなる憐れみを仰ぎ望む者の為に祈る。

主教 蓋、爾は仁慈にして人を愛するの神なり、我等光榮を爾、父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

(詠) アミン



サクリスタン(聖具係)は十字架を盆に載せ主教のところに運ぶ。主教は十字架を取り同じ場所に立つ。十字架で、四方、東西南北を3回ずつ祝福。輔祭は十字架と反対側を炉儀。そのたびに唱える。

輔祭 衆人言うべし、主に祷らん

(詠) 主憐れめよ。(3回) 各国語で





輔祭 睿智

主教はサクリスタンの持つ盆に十字架を置き、権杖を取りカフェドラから至聖所の前のアンボンに進み、
 主教 至聖なる生神女よ、我等を救い給え。

詠隊 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、
 実の生神女たる爾を崇め讃む。

主教 ハリストス神、我等の恃みや、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

詠隊 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に アミン。

主憐れめよ(3回)。福を降せ。

主教はソレヤに昇り、権杖を返し、十字架を取って、発放詞を誦する。

主教 【発放詞】

終わると、輔祭は聖水を持ってくる。主教イソップで聖水を、至聖所、西方、ついで南、北方にそそぐ。主教十字架に接吻し、神品及び衆人に接吻させる。この時、各人に聖水をそそぐ。

★そのとき「いくとせも」を歌う。

Handwritten musical score for the first system. The treble staff contains a melody with notes and rests, and the bass staff provides a harmonic accompaniment. The lyrics 'いくとせも' are written below the treble staff.

Handwritten musical score for the second system. The treble staff continues the melody, and the bass staff continues the accompaniment. The lyrics 'いくとせも' are repeated below the treble staff.

Handwritten musical score for the third system. The treble staff concludes the melody, and the bass staff concludes the accompaniment. The lyrics 'いくとせも' are repeated below the treble staff.

ム、ガ ヤ レ タ

カスタルスキー

Handwritten musical score for the first system. It consists of two vocal staves and a piano accompaniment staff. The vocal staves have lyrics "ム、ガ ヤ レ タ" and "ム、ガ ヤ レ" with a long note. The piano staff is in 3/4 time.

Handwritten musical score for the second system. It consists of two vocal staves and a piano accompaniment staff. The vocal staves have lyrics "ム、 --- ガ ヤ ム、ガ ヤ レ" and "ム、 --- ガ ヤ ム、ガ ヤ レ" with a long note. The piano staff is in 3/4 time.

ム, がヤ ム, がヤ レタ レタ

ム, がヤ レタ ム, レタ レタ ム, レタ

ム, がヤ レタ ム, がヤ レタ ム, がヤ

ム, がヤ レタ

時課を始める。
聖体礼儀 開始